

# Special Interview

スタッフの生の声を聞くインタビューコーナー。  
どのような経験を経て今に至り、  
現在、どのような思いを持っているのかを聞いてみました。

自分で描く絵は、  
自分にしかない手順があるので、  
それを見つけてるのが  
近道だと思います。

## 絵画教室講師・画家 奥西 千早 OKUNISHI CHIHAYA

武蔵野美術大学卒業。日本画の画家として活動中。  
定期的に個展も開催している。美術館での勤務経験  
もあり、美術そのものへの造詣が深い。ひとりひとりと  
真摯に向き合い、一番良いものを引き出すことをモットー  
としている。「デザイン事務所がひらく絵画教室」では、  
大人クラス、子供クラス両方の先生として活躍中。

### 保育園の時から 絵を描いていました

編：最初に絵を描いた時の記憶はありますか？

奥西：確か保育園くらい。女の子のドレスとか描いてました。絵が好きだったというか、時間をかけて細かい作業をするのが好きというか。これに没頭していれば他のことに気を取られずに済むな、と思ったんだと思います(笑)。

編：二人の時間が好きだったのですか？

奥西：そうですね、正直保育園の頃はあまり喋らなくて、人と仲良くなるのが上手ではなかったようです。小学生の時も同様でしたが、数人の友達いました。

編：美術への道を意識したのはいつからですか？  
奥西：最初は母が「この子は絵が好きだからその分野に進んだらいい」と推してくれました。小学校の終わりくらいには意識しました。それで高校は美術の専門高校に行きました。都立芸術高校(当時)というところで、美術科の中でもいくつかコースが分かれていました。そこで日本画を選んだのです。

わたしは中学の時に近所の絵画教室に通っていたのですが、その先生が油絵の画家で、中学時代は油絵ばかり描いていました。高校のコースを選ぶ時に油絵に進むという道もあったのですが、先生の勧めもあり、日本画を選んだ、という流れでした。

編：進学は美大択でしたか？  
奥西：そうですね。描きたいものがあって、それを表現する技術がなかったのが

どかしくて、東京芸大を目指しました。東京芸大に入りたという気持ちよりは、そこへ向けての勉強をすれば、技術も自ずと高いレベルで身につく、自分の表現したいものが表現できるようになるのでは、という期待が大きかったです。

編：大学に入るために予備校に入りましたか？  
奥西：はい、3年生の夏季講習からスタートしました。最初に東京芸大の受験のための模試があったのですが、そこで打ちのめされまして、ちゃんと勉強しなくては、と思いました。河合塾美術研究所という予備校です。

### 自分の進路を 見極める10代でした

編：大学はどうやって決めたのですか？

奥西：いろいろ考えて、最終的に自己推薦(※1)で入れるようにしよう、と思いました。それは武蔵野美術大学にしかありませんでした。

最初は東京芸大を目指していたのですが、芸大に入った先輩の話を聞くうちに、「決められたことができるかどうか」だけでジャッジされるのは自分に合っていないように思いました。私には描きたい絵があったので、それを見て評価して欲しいと思いました。目の前のモチーフを見て全員で同じものを描き、「これが足りない」といった部分を指摘され、その指摘数が少ない人が合格するという世界。その選ばれかたで選ばれるのは嫌だな、と思ったのです。

そして急遽進路変更し、ポートフォリオを作成し、武蔵野美術大学を受けた、という流れです。

編：それまでは東京芸大一本だったのですか？

奥西：一本でした。私は3年間浪人しましたが、東京芸大を受験する層としては珍しくはなかったです。予備校に通って3年、自分で言うのもおこがましいですが、ある程度デッサン力が身につけてきたように感じていたのです。つまり「表現するため技術力を身につけたい」という自分の目的を達成したので、今度は自分の表現を追求していきたいと強く思っていたので進路変更ですね。自己推薦ですと東京芸大との併願はできませんでした。

編：ちなみに進学先としてはどういった選択肢があったのですか？

奥西：私自身の方向性としては、東京芸大、あるいは武蔵野美術大学、多摩美術大学くらいの選択肢でした。もちろん他にもいろいろな美術系大学はありますが、どこを受けても良いのですが、当時の自分のレベルや通いやすさとしてはその3つくらいでした。

私が武蔵野美術大学を選んだのは、何度か学校を見学して、雰囲気がいなと感じたからです。

編：実際大学はどうでしたか？

奥西：本当に楽しかったです。浪人していたこともあって、「やっと入れた」という感激から、専門の日本画以外の座学の授業などもたくさん取っていました。提携している他の学校の授業まで受けに行ったりとか。哲学やラテン語の授業は同じ先生でしたが、特に面白かったです。高校までと違って、実際の研究者が教鞭をとっているの、奥行きが違うのです。絵を描きたくて入ったのですが、それ以外にもたくさん受け取るものがありました。大学は気持ち良さあればなんでも吸収できる場所、というイメージでした。図書館や他のゼミに行ったりと、とにかく色々していました。

編：大学の卒業時にはどうでしたか？  
奥西：大学院の試験を受けました。大学院の試験は実技試験と、論文提出、面接でした。修士2年は自分の作品制作が研究のテーマとなります。ずっと日本画をやってきたので修士ではあえて日本画以外の分

野にもアンテナを伸ばすようにしました。映像をつくったり、座学で学んだことを実技に取り入れたりとかが...

編：大学に入るために予備校に入りましたか？  
奥西：はい、3年生の夏季講習からスタートしました。最初に東京芸大の受験のための模試があったのですが、そこで打ちのめされまして、ちゃんと勉強しなくては、と思いました。河合塾美術研究所という予備校です。

編：大学に入るために予備校に入りましたか？  
奥西：はい、3年生の夏季講習からスタートしました。最初に東京芸大の受験のための模試があったのですが、そこで打ちのめされまして、ちゃんと勉強しなくては、と思いました。河合塾美術研究所という予備校です。

編：就職は成功したのですか？  
奥西：一般の会社に事務として就職しました。でも、そこは自分に合わなくて、どうしようかと思っていた時に上野の森美術館に常勤の仕事に空きがあることを知り、転職しました。そこは学生時代からアルバイトをしていた場所だったので、リラックスできました。事務的な仕事だったので、しばらくしてもう少し「絵を教える」仕事をしてみたいと思います、この絵画教室にきました。

### 教えられたこと、 学んだことを糧に

編：絵画教室の仕事はどうですか？

奥西：学ぶことが多いですね。マンツーマンのスタイルはいいな、と思ったのですが、生徒さんそれぞれを良く知らないのと、「こうすればうまく描けますよ」「こうしたら効率よく描けますよ」などと簡単には言えません。そもそもそれを求めているかどうかもわかりませんし、相手にも経験値や思いがあるので、自分が知ることと交換するという感覚です。

編：芸術家としての活動はどうですか？  
奥西：今は定期的に展覧会を開催し、活動の幅を広げています。

編：画家を目指す人に何かアドバイスはありますか？  
奥西：自分に自信を持つことは大切だと思います。諦めでもあるのですが、他の人と比べるとキリがないので、「自分にはこれしかない」という「自分がもっているもの」を軸にしていくのが健康的だと思います。常に「あれができた自分」「ああいうふうにして思った自分」という自分と比較はしますが。

編：絵画教室に来てくれる方たちに向けて、何かメッセージはありますか？  
奥西：自分の絵は自分で作れる世界なので間違っているということはないです。正しい絵をみると、正しい手順を踏まないと描けないものだと思うかも知れませんが、自分にしかない自分の手順があるので、それを見つけてるのが近道だと思います。

編：ありがとございました。  
奥西：ありがとうございます。

※1ポートフォリオ審査とプレゼンテーション、デッサンテストと選考するシステム